連載

第4回

会計史という世界を歩く

三光寺 由実子

日本中世会計史への転換期

－日本の中世会計史を研究するべきなんじゃないだろうか－

こんなことをおぼろげながら思い出したのは、意外にも中世フランスの会計帳簿を追い求め、パリへ留学している最中であった。色々な古文書館へ足を運び、中世フランス史・中世フランス経済史・中世フランス古文書の専門家と話をしたが口を揃えて言われたこと。それは「じゃあ、その時の日本の会計史ってどのようなものなの」。

江戸時代までの会計史については、全く知らないわけではない。日本会計史において、今日広く一般に利用される簿記である「複式簿記」が、欧米諸国の書物を翻訳するかたちで入ってきたのが明治初期であることをうけ、この時期の会計史研究というのは特に近年、活発に議論がなされている。それがゆえ、明治期以前に、日本はどのような固有の簿記（これを西洋式簿記に対して「和式帳合」、「和式簿記」等と呼称）を有していたのかを解すべく、江戸時代の商家に残る会計帳簿の研究を有していたのかを探求する会計史研究というものが存在する。

他方、日本唯一の会計史の専門研究雑誌である、『会計史学会年報』に掲載されている論文の傾向を見ると、地域別では日本を対象とした研究は22パーセント、そして時代別では、中世を含め近現代以外を「その他」として統括した割合が僅か8パーセントに留まっている。（中野常男・橋本武久・清水泰洋・澤登千恵・三光寺由実子［2013］「『会計史学会年報』に見るわが国の会計史研究の特質（1983～2012年）」国民経済雑誌、第208巻第2号、17～38頁）。すなわち、日本国内においてすら、日本中世の会計史を研究しているのはごく稀だということである。

では、日本中世には、会計史研究ができるような史料はないのであろうか。いや、むしろその逆で、宝が山に埋もれてしまっている。つまるところ、日本史や日本経済史分野においては欠かすことのできない貴重な中世の史料が、会計史においては等閑視されてきているという現実がそこにはあったのである。

今日手に取ることができる、日本の中世以前の文書の過半は社寺関係の文書である。とくに、畿内の大社寺の文書が大半を占め、かつそのほとんどが、古代から中世にわたって社寺経済の基礎をなした社寺領荘園に関するものである。そして、とりわけ筆者の目を引いたのが、現在、ユネスコ「世界の記憶（Memory of the World）」に登録されている、『東寺百合文書』（京都府立京都学・歴彩館所蔵　約2万5千通）である。ここには、多くの算用状（散用状とも書く）と称される、会計史料が存在する。

次回、この算用状を用いた、中世日本の会計史の世界へ、読者をご招待しよう。

〈和歌山大学経済学部 准教授 博士（経営学）〉

令和3（2021）年度後期 和歌山大学岸和田サテライト

社会人受講生募集！ 10月より開講

学部開放授業

「学童期の子どもの育ちと現代社会」
「災害後の生活再建とまちの復興」

【仮登録期間】
8月19日(木)～9月9日(木)　インターネットによる仮登録

大学院科目等履修生

「租税法実務演習」「財政学」
「監査論」「政策過程論」

【出願期間】
8月19日(木)～8月27日(金)【必着】

※出願方法など詳細は「和歌山大学 岸和田サテライト」のホームページでご確認ください。

お問合せ　和歌山大学岸和田サテライト　岸和田市港緑町 1-1 南海浪切ホール 2 階（TEL / FAX：072-433-0875）